参加者の声

東日本大震災当時、私は福島県いわき市に住んでおり、押し寄せる黒い津波、近隣工場の爆発、原発の問題など目の前に広がる衝撃の光景は今でも忘れることができません。

また、原発問題が後を引き衝撃を受けたのが父の一言です。昔ながらの頑固おやじ、力強くわが道を突き進むタイプの父が「正直先が見えない」。初めて聞いた弱音です。それを受け、私はサラリーマンを卒業し、私なりに地域貢献に努めることができればと一歩踏み出し活動することを決意いたしました。この時期に懇親会へ参加させていただき、大西学院長をはじめ同窓会の皆様からの温かいお声掛けやお心配り、勇気を頂きました事、厚く御礼申し上げます。

佐藤英明、梨奈（04年法学部、経営学科卒）

会場で懐かしい先輩方のお顔を拝見したとたん、ほっとしました。初めてお会いした皆様からは、震災のその後に対する心配りや励ましの言葉と一緒に、たくさんの生きる勇気をいただきました。ゼミやサークルの先輩方とは、当時の懐かしい話題で大いに盛り上がりました。また、大西学院長より、明学の学生が多数ボランティアとして活躍しているとうかがい、同窓生としてとても誇らしく思いました。会の終わりには、参加された皆様と一緒に校歌や応援歌を歌いました。当時の記憶が鮮明によみがえり、感激しました。卒業後30年を経て、初めて明学のありがたさを実感した次第です。

藤村佳朗、有美子（83年社会福祉学科卒）

品川駅からバスに乗って8時間。仙台の被災地に入ったのは夕方になってしまいました。

バスから地域の様子を視察し、被害の大きさを改めて実感するとともに、復興の兆しに希望も感じました。

懇親会で挨拶に立たれた大西学院長が、「僭越ですがお祈りします」とまず祈って始まったのでした。私は感動しました。私たちは正に祈りに来た筈です。同窓生としての祈りです。それからの楽しさは言うに及ばず、ジャズにのってスイング、スイングで、青春にかえった喜びを共有したのでした。この旅行でこそ、明治学院の同窓生の絆を再認識し、同窓会の存在意義を証しできました。このような企画に感謝しています。

佐竹順子（63年社会学科卒）